

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

企業・団体と連携し、
社会とつながる
機会の創出

外部講師から学んだ探究学習の
ポイントを生かし、校内や企業の
課題に対する提案を練り上げる
山梨県・私立東海大学付属甲府高校

生徒の 転換点

- 生徒は校内や企業の課題を題材にした探究学習に取り組む
- 教師は探究学習の進捗やチームワークを見取り、生徒の活動に伴走する

外部講師のアドバイスを基に 文化祭の活性化案を改善

山梨県・私立東海大学付属甲府高校は、学校・企業・大学をつなぐNPO法人の協力を得て、企業と連携した探究学習「ガチ・TOKAI・プロジェクト」の構築を進めている。

「本校はキャリア教育を中心とした探究学習に取り組んできましたが、実社会の課題をひとつごとく感じる生徒が少なくありませんでした。そこで、より主体的に探究学習に取り組む姿勢を養うことをねらいとして、NPO法人や企業から提示される課題に生徒が取り組み形にしました」（鈴木伸和教頭）

25年度は、探究学習の手法の習得を目的に、

1年次に「ブレ探究」を実施した。具体的には、NPO法人などから講師を招き、生徒は情報収集やデータ分析の方法、アイデアを生み出すための視点などを学び、それらを生かす機会として「次年度の文化祭の来場者数を増やす方法の提案」にグループで取り組んだ。そして12月の中間発表会で外部講師からアドバイスを受け、それを基に案を練り上げて、2月の全クラス合同の最終発表会に臨んだ（P.2図1）。

最終発表会での提案内容は、着眼点が中間発表会に比べてより具体的になっていた。当初は「装飾を派手にする」といった表面的な提案が目立ったが、最終的には開催日程や会場の設定、広報の方法といった、運営施策の改善を提案する内容へと進化していた。

学校概要

設立 1946（昭和21）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約230人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、新潟大、都留文科大、山梨県立大に4人が合格。私立大は、駒澤大、中央大、東海大、東京電機大、東洋大、日本大、法政大などに延べ137人が合格。短大・専門学校進学76人。就職11人。



左上から時計回りに、鈴木伸和（教頭）、八巻英世（校長）、齊藤政道（副校長）、遠藤恭太（企業連携講座チーフ、地歴公民科主任）、安孫子雄来（研究部副主任・ユネスコ委員会チーフ、数学科）

※プロフィールは、2026年3月時点のものです。

図1 2025年度 1年次「ブレ探究」の流れと、26年度 2・3年次 課外活動の計画

学年	活動内容
1年次	「文化祭の一般来校者を増やすためにどのような取り組みができるか」「文化祭を楽しんで帰ってもらえるか」をテーマに文化祭に参加する。
	文化祭後、生徒個々が今年度の文化祭について振り返る。
	グループになって今年度の文化祭について振り返り、その内容をクラス内で共有。
	外部講師が文化祭を振り返って改善点などを提言するとともに、情報収集やデータ分析の方法を指導する。
	次年度の文化祭を活性化する方法をグループで検討し、プレゼンテーションの準備をする。
	クラス内で中間発表会を実施。外部講師が各グループの企画内容や発表資料などに対してアドバイスをする。
2・3年次	各グループは外部講師のアドバイスを踏まえて、提案内容や発表の仕方を改善する。
	全クラス合同の最終発表会で各クラスの代表グループが発表。1年間の取り組みを振り返り、外部講師が講評する。
	生徒は27社の企業が提示する課題の中から自分が関心のあるものを選んで取り組む。総合進学コースの生徒は2年間で6社以上を選択。特進アドバンスコースと特進バランスコースの生徒は希望制。活動時は公欠扱いとする。

図2 「地域の旅行会社との連携プロジェクト」概要

参加者	1～3年生の有志の生徒30人
課題	旅行会社が所有する、山梨県の河口湖駅前にある訪日旅行者向けの観光施設の外国人利用者数を増やすための方法を提案する。企業からは、利用者数の増加、屋上スペースの活用法、店内スペースの活用法、地域の魅力を伝えるツアーの設計、訪日旅行者向けのお土産の開発、電動キックボードの活用法の6つのテーマが提示された。
活動の流れ	放課後に計4回の活動を実施。1回目は旅行会社が課題について説明し、2回目は生徒が6つのチームに分かれて、取り組むテーマを検討。3回目は施設を訪れ、その周辺でヒアリングなどの現地調査を実施し、4回目は各チームが考えた方法を旅行会社に提案した。
各チームの提案例	駅から見える場所に、同施設を紹介するウェブサイトへ誘導する2次元コードを設置、屋上へのグランピング施設の設置、富士山が見えるスポットを含めた日帰りの観光ルート、ほうとう作りや宝石の研磨体験といった山梨県の文化を体験できるツアーなど。

※図1・2ともに学校資料を基に編集部で作成。

「提案内容を練り上げる過程で、生徒の中に『文化祭をより盛り上げたい』といった意欲が高まったのだと思います。外部講師から学んだ、探究学習に取り組む際の考え方を生かしている様子が見えましたが」（齊藤政道副校長）

生徒の質問を基に問題の本質に迫り、教師は伴走支援に徹する

25年度は、地域の旅行会社が提示した、「自社が所有する訪日旅行者向けの観光施設の外国人利用者数を増やす」という課題に取り組む課外活動も実施した（図2）。同活動の参加者を全校生徒から募ったところ、1～3年生の約30人が集まった。同社は駅前にありながら利用者数が伸び悩んでいたため、生徒にはその解決につながるアイデアが求められた。

同活動は、①企業による課題の説明、②学年混合のチームに分かれて取り組むテーマの検討、③現地調査、④企業への提案と、4回にわたって行われた。現地調査では、あるチームは施設の見学後に最寄り駅に行き、訪日旅行者に英語で「なぜ、ここに来ましたか」「この後の予定は？」などとインタビュー調査を行った。「生徒に現地調査の事前準備を勧めたところ、そのチームは訪日旅行者に話を聞くことを想定して英語の質問文を用意しました。臆することなく外国人にインタビューする生徒の姿に、地域を活性化したいという思いを強く感じ

ました」（企業連携講座チーフ・遠藤恭太先生）
同活動を担当した教師は、生徒の主體的な学びの伴走に徹することを心がけた。研究部副主任の安孫子雄来先生は、屋上スペースの活用法をテーマに選んだチームの生徒から、「提案資料にサウナ施設の利用方法を示す図を盛り込んだ方がよいか」と質問された時、「どうすると企業の方に提案内容をより理解してもらえるとと思う？」と問い返した。

「大切なのは生徒が自ら考え抜くことです。そのチームも生徒間で話し合い、提案資料に図を盛り込むことを決めました。教師は成果を急がず、『失敗してもよい』という姿勢で、チーム内のコミュニケーションや進捗管理の確認に徹しました」（安孫子先生）
ほかのチームからは屋上へのグランピング施設の設置などの提案があり、採用への期待も高まっているという。

26年度からは2・3年次に企業との連携による課外活動を実施し、「ガチ・TOKAI・プロジェクト」を本格化させる。生徒は「おにぎりの新商品の開発」など、27社の企業が提示するプロジェクトの中から選んで取り組む（図1）。
「意欲的な生徒のみが取り組む活動にならないよう、同じ課題に関心を持っている生徒が集まって取り組む形にしました。生徒間で協働し、切磋琢磨することを通じて、より主体的で質の高い探究学習を実現したいと思っています」（八巻英世校長）